



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成15年12月20日
通巻35号

第7回下水文化研究発表会開催される

11月15日第7回下水文化研究発表会が日本水道会館で行われました。今回は、本会が途上国の衛生改善に海外技術協力事業として具体的に取り組んでいくスタート台と位置づけました。日本や先進国とは異なった特性を有する発展途上国の衛生状況を改善することを考えるとき、今回のテーマとした「衛生の原点」に立ち戻ってみななければならないことであると考えられます。

参加者も約100名に達し、分科会、パネルディスカッションとも熱のこもった議論を行うことができました。途上国の衛生問題ばかりでなく、本会ならではの「下水文化史」、「水文化」の継承や新たな発展にかかわる活動、国内の水問題についても優れた論文が集まりました。

ビルキス女史の基調講演は、我々日本人が途上国の衛生の実情と容易には想像できないような問題にも触れられた貴重なものでした。パネルディスカッションは立場を越えながらも、地球上に24億人いるといわれる衛生設備に

アクセスできない人口を少しでも減らそうという意図で一致していたと思います。また、衛生の改善を考えたとき、それによるインパクトもあり、途上国の人々の生活全般や環境にも視野を広げる必要性があるといった議論となりました。そして、本会が進めようとしている海外技術協力プロジェクトについても参加者から理解を得ることができました。



Bilqis Amin Hoque女史

研究分科会 座長報告

セッション1 「下水文化史・下水文化活動」

日本下水道協会 照井 仁

セッション1では、下水文化史関係の発表が5編、下水文化活動の発表が3編あり、いずれの発表も質が高く、今後の研究及び活動に大いに参考となる発表でした。

「1. 江戸・明治における人糞尿の利用法」では、江戸・明治期に発行された農書や農業指導書は、し尿の肥料効果を高めるための様々な研究や工夫がされていたことを紹介し、その研究姿勢は農家の立場に立ったものであったことが発表された。し尿の農業利用の歴史については、文献が乏しいこともあり、これまでほとんどわかっていなかったが、江戸期等の農書の研究により、今後明らかになることを期待したい。

「2. 初期の江戸下水」では、江戸の町割り、町割りの中央部分に位置していた会所地が、ごみと下水の捨て場所であるとされてきたが、江戸に城下町がつけられた

当初から下水(道)がつけられていたことから、会所地には下水は排出されていなかったことが発表された。

「3. 間取りからみたトイレの位置の変遷」では、日本の家屋における便所の位置の変遷をたどり、古来、農家建築では外便所や軒下便所が一般的で、内便所となったのは武家建築において便所を専用の部屋として機能分化させたからという。そして、便所は母屋から離されていたものが、敷地の制約等によって母屋と一体化が強まったことが発表された。建築史の分野においては、便所はまったく無視され、研究されてなかっただけに、目新しい研究である。

「4. ポンプ糞 - 苦役からの解放」では、古来から水を汲み上げる作業は重労働を伴うものであり、動力式ポンプの出現は人間を長年の苦役から解放するだけでなく、近代の産業化に大きな影響を及ぼし、日本の上下水道にも大きな役割を果たしてきたことが発表された。また、大阪市では、現在もポンプ場を抽水所、最終沈殿池を沈澄池と呼ばれることが紹介された。(☞2ページへ)

第7回下水文化研究発表会講演集ご購入のお願い

研究発表会の当日に参加することができなかった会員の皆様への講演集のご案内です。ビルキス女史の基調講演論文は、発展途上国の衛生の現状を知る貴重な文献です。また、研究論文も座長報告にありますように貴重で、ユニークな研究内容です。是非ご購入していただきたく存じます。価格は当日参加者と同じく会員1,000円、非会員1,500円(いずれも送料別途)です。お申込みはFAX、e-mailで事務所宛お願いします。

「5. 揺籃期の流域下水道（寝屋川流域下水道）」では、日本最初の流域下水道である寝屋川流域下水道は、大阪府の当初計画では流域下水道というより広域下水道の考え方で、流域全体を一括管理する（2面へ続く）ことを念頭に置いており、国との考え方に違いがあったことが発表された。そして、流域下水道と公共下水道との一体管理、河川管理者との一体化との実現に努力すべしとの意見が開陳された。

「6. 歴史的水流の復活と湧水の保全...仙台からの報告」では、城下町仙台を開くにあたってつくり、昭和初期に姿を消した四ッ谷用水の復活を目指す市民活動の経過が報告され、湧水・溜池調査を行いながら、用水復活や湧水などの保存に成功した例が発表された。

「7. 小金井市式雨水浸透ます事業から考える 保水型下水道の実現に向かって」では、小金井市は公共下水道が100%普及しているものの、大雨時には越流水による河川の水質汚濁や水量の枯渇という問題を生じ、そのため雨水を地下に涵養するため、環境団体、研究者、行政が一体となって雨水浸透施設設置事業に積極的な取り組みを行い、今では雨水浸透施設設置率が43.2%と世界一となっていることが発表されるとともに、保水型下水道が提唱された。

「8. 南無雨陀仏と保水型下水道 東本願寺の屋根から、京都地下水盆がみえる」は、発表者が京都の東本願寺の雨水利用のプロジェクトに参画されており、これまでの下水道は、廃棄物として扱われている雨をすみやかに排除しているとして、「雨を捨てない水環境システムの総体」としての保水型下水道を提唱された。そして、これからの水問題は、上水、下水、河川、環境、防災を統合して、地域水循環、浅層地下水循環の視点で考えるべきで、降った雨、使った水をきれいに近所に戻すことが発表された。

最後に、下水文化史・下水文化活動部門では、1編あたりの発表時間が短く、また座長の時間管理がまずかったこともあり、発表者の方々にご迷惑をおかけし、紙面を借りてお詫びいたします。

セッション2 「海外下水文化」

パシフィックコンサルタンツインターナショナル 石井 明男

参加された方は講演者の独創的で、意欲的な内容に堪能されたと思います。それだけ面白い話が満載のセッションでした。

「ベトナムダンフォン村にける尿尿分離式トイレの導入」の発表は、この村に尿尿分離式トイレを85基設置した使用記録です。特徴は尿尿分離式トイレを使用していること。排便後の尿に灰をかけ、病原体を死滅、消臭をしていること、設置後の定着率が極めて高いことである。この研究の優れたところは、実際に現地で実施して、その成果を述べているところである。発表にはないが、実際はどのようなトイレにするか、材料はどうするか、現地での教育はどうするか、一つ一つ頭で考え、実施していったのである。発表はずっと聞いていたかったくらい素晴らしかったのだが、時間で終わりにしてもらった。

「途上国のし尿処理を考える」の話の特徴はなぜ日本がトイレについて途上国に協力するのが良いか話していることである。改めて考えてみると、日本はトイレや尿尿について科学的に研究した国である。尿尿の成分、尿尿の分解過程、施肥効果、回虫卵の死滅のメカニズム、行動科学的アプローチなどである。し尿処理施設というものには日本にしかないということである。その研究成果を利用しようとしたところが興味あると思う。

「都市貧困居住区におけるバイオガスの衛生設備とし



懇親会に参加されたみなさん



での有効性」の報告は、屎尿処理を目的で住民が建設費を一部負担しバイオガスプラントを導入しその有効性についての発表講演である。この結果このタイプの設備で、住民は支払いに応じるだけのメリットを感じ設備は稼働し続けることがわかったことは大変な収穫である。それではなぜそうなったかが興味あるところである。これも時間の関係で深く踏み込めなかったが素晴らしい成果であると思う。

「バングラデッシュにおける衛生に起因する健康リスクと軽減方策の適正概念」は、ODAの悩みを学問的にまとめようとした意欲的な発表である。ここでは、衛生に起因する健康リスクはどういうものか、また、健康リスクを軽減する適正技術、求められる条件を探っている。また、バングラは現在飲料水にヒ素が含まれているので、その対策とシステム改善のための方策を述べている。良かれと思って行うことが裏目に出ることはODAにはまある。

「途上国援助の視点についての考察」については、日本のODA大綱について述べ、実際の援助と照らし合わせている。その上で援助のあり方に言及している。

“Current Status, Comprehensive Management Tool For Sustainable Development in Water Supply, Waste Water and Storm Water Disposal of Dhaka City”はダッカ市の水道、下水・都市排水行政の経緯、現在行われている行政、問題点を述べている。バングラデッシュ国ダッカ市の行政の難しさは、人口が1000万人、アジアの大都市である。しかし、財政が豊かでなく、この先の見通しが無い。苦悶が語られた。

繰り返すが、このセッションはきわめて質の高い内容であったことを皆様にご報告したい。

セッション3 「下水文化研究」

東京設計事務所 妹崎 大次郎

セッション3では8編の発表が予定されていましたが、日程上の都合等により2編が急遽発表が取りやめになりました。

「海外における上下水道事業民営化の動向」では、欧米諸国における上下水道事業の民営化方式の違いやその動向等、我が国でも注視されている話題についての報告でした。

引き続いての「水道事業の公民連携反対論を検証する」では、公共サービスの公民連携、いわゆる民営化に対しての国内ばかりでなく海外でも様々な反対論・否定論が主張されていることに対して、それら多くの反対論・否定論はほとんどが誤解と情報不足に起因していると論破されるなど、先の発表と合わせ興味深い発表でした。

次の「雨水の雑用水道等への利用 ~福岡市の雨水利用大作戦~」、「都市流域における水環境形成のための水循環再構築」の2編は、福岡市における過去の大湯水を教訓とした具体的な取り組みの現状と、河川流域での下水道整備に伴い生じる問題点に対し、良好な水環境形成のためには今後どうあるべきかという計画手順と、その結果の施策に対する評価・選定プロセス等についての報告でした。

結果として2編の論文とも流域住民の理解と協働とがこれら施策を進めていく際に不可欠であると述べられ発表をとりまとめられました。

「下水道のシステム転換 - 進化下水道学事始め -」は、わが国の下水道システムの歴史を概説し、“生命と環境を守る”という下水道システムの基本哲学から、家庭を聖域としない新しい制度を実現すべきであり、進化下水道学という体系の必要性を述べるなど非常に示唆に富んだ内容であり、会場との意見交換も活発に行われた発表となりました。

最後となった「処理基準を上げ下水行政を一本化せよ」の発表では、発表者の下水道行政に対する経験等から、下水道類似施設に関連した縦割り行政の弊害、処理基準、そして流域下水道、合流式を始め、様々な単位施設の問題点等を辛辣に批判し、今後どうあるべきかの意見を開陳されました。

セッション3は以上6編の発表が行われました。題名はそれぞれ異なりましたが、その根幹のテーマは全て公・民(私)の協働が不可欠ということではなかったかと思えます。

各発表の進行をスムーズに行うべき座長が、一人の聴衆として熱中しすぎるなどの不手際もあり、発表者の皆様に改めてお詫びすると共に、それぞれの発表時間も20分を越すほどの熱気に包まれたセッションであったことをご報告します。

優秀論文賞受賞者・海外招聘者からのメッセージ

感激・感動しました初受賞

みずとみどり研究会 倉 宗司

第7回下水文化研究発表会において、まったく予測をしていなかった優秀論文賞をいただき、驚きと嬉しさが交互して当日は心の整理もできずにいました。

人見達雄氏(雨水市民の会)から発表の誘いがあった時は、貴研究会を下水道に携わる一人として恥ずかしい話で

すが知りませんでしたからお断りしましたが、人見氏から今回のテーマである「保水型下水道」の定義が決まっていな中、雨水貯留・浸透は一对で考える必要があり、小金井市で実施している雨水浸透施設事業自体が保水型下水道の一部と言われ、私の今までの体験と考えをまとめました。

当日「発表会講演集」を渡され、レベルの違いに場違いと後悔をしましたが後の祭で発表させて頂きました。

今回の受賞は、私の発表内容より「保水型下水道」とい

う言葉を貴研究会の人たちに認められたことに感激・感動しています。

雨水公費の原則である現在の仕組みから、天水(てんすい)を下水として扱わず有効利用することは、公費(一般財源)の歳出抑制や受益者負担(特別財源)の軽減等にも繋ることであり、循環型社会の施策として「保水型下水道事業」に移行する時代にきていると考えます。

今後、貴研究会において「保水型下水道」の定義を論じていただければ嬉しく思います。

最後に、受賞させていただき貴研究会に感謝しております。本当にありがとうございました。

第7回下水文化研究発表会に参加して

京都大学地球環境学大学院 原田英典

筆者は京都大学地球環境学大学院修士課程の学生であるが、この度第7回下水文化研究発表会に参加し、優秀論文賞という栄誉に預かった。以下では、筆者が下水文化研究発表会に参加して得たことなどを簡潔に述べる。

本発表会のテーマは、「衛生の原点 地球規模の衛生の改善を考える」であり、基調講演に始まり非常に多くの発表が途上国での衛生改善に関する具体的な活動についての発表であったことが印象的であった。筆者はこの中で、「ベトナムダンフォン村における尿尿分離トイレの導入」という、同じく具体的な活動についての発表を行なった。発表をする一方、発表会においては、バングラデシュを中心とした具体的な活動についての情報を得ることができたことが、筆者にとっては自らの活動

に対して非常に有益であったと共に、途上国での衛生改善活動に注目している多くの参加者にとっても大変貴重であったと思われる。

一方で、筆者のような若輩者にとっては、本会のようなさまざまな分野の方が集まり議論する場は、一つの世界にいたのでは触れることが少ない多くの異なる考え方を知るという意味でも絶好の機会であった。多くの発表やパネルディスカッションにおいて、議論は活発に行なわれ、さまざまな立場の人々がさまざまな考え方を述べるという自由な雰囲気の中での議論こそ、これからの下水文化を考えていくうえで必要なことであるだろう。個人的にも、筆者の発表において非常に多くの方から様々な種類の質問およびコメントを頂き、筆者としても大変勉強になった。

同時に、当会そのものが海外技術協力をはじめるということで、提案がなされていた。具体的には、尿尿分離型のトイレを途上国において導入する事業となるようだが、尿尿分離トイレの導入は筆者もベトナムにおいて実際に実施した事業であり、今後、どのようなトイレを導入していくか、どのように導入していくかについて注目したい。

以上、本研究発表会は、多様な立場からのさまざまな考え方に触れることができ、筆者にとっても大変価値のあるものであった。同時に、今後ともこのような活動を続けることにより、下水文化に関わる人々の交流が進むであろう。最後に、今回頂いた優秀論文賞に対して敬意を示すと共に、準備運営に携わった多くの関係者の方に感謝の意を示し、今回の研究会に関する感想を終わりとさせていただきます。

7th JADE's Conference - Progress Towards Future Challenges

Kazi Mohammed Sheesh

Chief Engineer, Dhaka Water Supply and Sewerage Authority, Bangladesh

The 7th conference of JADE held on 15th November 2003 in TOKYO indicates that the fundamental determinants of public health are safe and adequate water supply, sanitary means of excreta disposal, and basic hygiene. It also observed that the heavy burden of disease experienced in many developing countries like Bangladesh related to water, sanitation and hygiene is largely attributable to deficiencies in basic services and behaviors.

In this background the Progress and Challenges faced by Bangladesh discussed vividly and it is felt that better health for people in Bangladesh requires

- i) use of a clean water supply
- ii) applying appropriate technology to use of sanitary latrines and
- iii) good personal hygiene.

Some of the challenges and issues for the future are:

- i) reaching water supply and sanitation program to the poor majority through low cost technologies
- ii) development of easily maintained and culturally acceptable technologies
- iii) changing people hygiene habits through public health education
- iv) increasing local community participation
- v) encouraging more active participation of women in decision making and control etc.

At the end of conference, representatives of JADE and participants from Bangladesh decided to combine their experiences and resources for water supply and sanitation program.



Mr. Kazi Mohammed

中川神社の社殿（祠）再建される

本会評議員 齋藤 博康

神 事

この度、山梨県丹波山村サオウラ(竿裏)峠(標高 1,440 m)の中川神社の祠が再建された。

好天に恵まれた平成 15 年 11 月 23 日(日)正午、地元の人々、日本下水文化研究会のメンバー、その他有志など関係者約 20 名が新しく建立された祠の前に参列し、神官による奉納式が厳かに執り行われた。参列者にとって麓からの登山は、健脚の人でも片道 2 時間程かかる難行だったが、藤森正法さんのお孫さん(小学校 1 年生と 4 歳の男子)2 人は身軽にこれをこなして大人を驚かせた。祠の前の広場から期待された富士山の姿は雲に遮られて見えなかった。

祠は、金治が山を去った昭和 10 年に創建されて以来、同 40 年に建て替えられたので、この度で 3 回目の再建に当たる。今回は、風雨に朽ちない堅固なものという地元関係者の強い願いにより、耐久性は 600 年といわれる白御影石造りとなった。

神事は正午から始まり、神官は身を清め、正装して社殿に注連縄、神前にお神酒を供えたのち、礼拝、散米、古い祠からの昇神の儀、新しい祠への降神の儀、祝詞、玉串奉奠、参加者全員による黙祷などが順序よく行われ、滞りなく終了した。

直後に、地元猟友会の有志による祝砲二発が発射され、こだまは全山に鳴り響き、行事終了の合図になった。その後、二頭の鹿が少し離れた林の中に現れ、参列者が驚いて見守る中を消えた。

祝 賀 会

祝賀会は民宿「たちばな」で午後 4 時から行われた。会場には山の祠に登らなかった人も大勢参加した(約 50 名)。祝賀会の式次第に入る前に、稲場紀久雄さんによる紙芝居が行われた。むかし、金治翁が村の子供達に接した優しい教育的な心遣いに倣って、稲場さんはこれを紙芝居で再現した。演題は「口のないやまんば」と「山になったおじいさん」で、物語と絵は稲場さん自身の翻案によるものだった。

子供向けに作られたとはいえ、参加者は稲場さんの語りに引き込まれ、感銘を受けた。「口のないやまんば」は木下勲さんが子供の頃祖父から聞いた話を基に脚色したものと紹介された。稲場さんはこの村には未発掘の民話が沢山埋もれており、これを是非発掘して将来は遠野市などと姉妹都市提携なども考えて欲しいと要望した。

祝賀会の次第は次の通り。発起人挨拶は、藤森正法さん(副代表)。中川

神社(再建)奉納の経過は伊藤巖さん(代表)。挨拶は前、現丹波山村長さん(岡部昭夫さん、守屋武彦さん)。祝宴にはおいしい鹿汁が振る舞われた。祝賀会の終わりは地元の流儀に従って、三人の参加者によって中締めが行われ、終了した。なお、金治翁の血縁者(金治翁の妹、とめさんのお孫さん)木下文教さんが八王子市から参加した。

経 過

中川金治翁は今から約 100 年前、東京都の水道水源林事務所の技師として奥多摩流域に入り、水源林の保護、育成に献身したが、その暖かく優しい人柄を通して、村人との交流を深めた。金治翁と村人との深い交流はこの山里の人々の心を惹き付けるものがあった。金治が東京へ出張して帰るとき、村の子どもたちは翁が持ち帰る絵本や文房具を楽しみに村外れまで迎えに出たという。村人は金治が東京都を退職して山を去った昭和 10 年、富士山が遠望できる丹波山村のサオウラ峠に小さな木造の祠を建て、中川神社と命名し、翁の遺徳を偲んだ。

30 年後の昭和 40 年、祠は風雨によって朽ちたため、再建されたが、それからさらに 38 年後、また老朽化は進んだ。平成 14 年 9 月、金治翁奥多摩入り 100 年を記念して「中川金治翁をしのぶ会」が持たれた。関係者は祠の老朽化をこのとき深く憂慮したが、再建の企図はこの時点では出なかった。木造の祠の寿命はせいぜい 30 ~ 40 年であり、今回再建しても次回以降その志を継いでくれる人がいるだろうかという懸念があったため、提案できなかったのだ。この状況を打破したのが藤森さんだった。今年 1 月、藤森さんは「中川翁が夢枕に現れた」という形で再建



再建なった石造りの中川神社の前で行われた神事
(右の木造の祠はこの後取り壊された)

を切り出した。もともと老朽化を憂慮していた人々である。この企画の中心となった関係者は、直ちに賛同した。そこで出された案は石造りの堅固なものにすることだった。

しかし、石造りの場合は、祠自体は長持ちするが、人々の心は金治翁を忘れてしまうのではないかと、金治翁への思いを受け継いでゆくためには毎年11月23日を記念祭として続けてゆくことが必要ということになった。

そこで、年が明けてから、中川神社再建委員会(代表に伊藤巖さん、副代表に藤森正法さん、発起人として上流側:木下勲さん以下3人、下流側:酒井彰さん以下9人)が発足し、趣意書を作り、募金活動が始められた。募金の目標額は100万円、日程として平成15年11月23日を新

しい祠の据付、奉納式とされた。

募金は順調に進み、目標を上回る約140万円(応募者79人)の浄財が寄せられた。祠は長浜市(滋賀県)の石匠竹原氏によって製作され、期限までに搬入された。強力不足のため、重量約575kgの石の祠をサウラ峠まで運び上げることは想像以上に難航した。ヘリコプターによる搬送も検討されたが、予算面で折り合わず、結局祠は20個に分割され、建設業者などの応援を得て、背負って急峻な山道運び上げられた。そのご苦労は想像以上のものがあった。因みに、祠の大きさは高さ1.3m、幅0.6m、奥行0.7mである。

趣意書に賛同し、募金に応じた方々の名前は祠の台座のステンレス銘板(後部)に刻まれ、合わせてタイムカプセルにも納められ内部に保存された。

第29回定例研究会(第23回し尿研究会定例会)報告

「浄化槽法制定の経緯と現状」

岩本 宏一*

10月31日(金)、東京ボランティア・市民活動センターで第29回定例研究会が行われました。お話しは(財)日本環境整備教育センターの佐々木裕信氏をお招きしてご講演いただきました。18時30分から始まりましたが、たっぷり2時間の熱演でした。

この日のために改めて資料を探し、見直し、整理して書き溜めたことを、まったく休み時間も無くお話してくださいました。資料を整理し、全体の流れを作りお話を組み立てられていました。まさに新作落語の世界です。

浄化槽法は、浄化槽の製造から設置、維持管理に至る一連の体系を制度化したものです。当初の目的は、単独処理浄化槽の適正管理にありました。しかし、門外漢にとっては不思議な法律です。廃棄物に関する法律でも、下水道法でも法律の起源があって時代に合うように変わっていききました。しかし浄化槽法はわずか20年前の昭和58年に制定されましたから、突然世に出てきたような気がしてなりませんでした。

確かに当時は、汚し質の問題や放流同意で周辺の住民とのトラブルが多く発生したそうです。水質汚染を食い止めるために設置された私的構造物でありながら、生活

環境の向上といった公共性を有する浄化槽を何らかの形でコントロールするために、法と技術の両面での仕組みを構築する必要があったという時代背景を理解することができました。

法の施行時にはすでに浄化槽が500万基以上も設置されており、制度を作る前に実態ががっちり出来上がってしまっていたのです。このため、従来の法律や概念の下では、複雑化していた各方面からの利害などの調整も難しくなっていたようです。

この法律が、既成の立場から離れた位置で草案された「議員立法」だということをはじめて知りました。

その後、今日にいたるまで、下水道の未普及地域に浄化槽は定着してきました。平成12年の法改正により合併処理浄化槽が浄化槽として規定され、従来の単独処理浄化槽の新設は平成13年4月1日より原則的に禁止されるに至っています。

本講演では、法律制定の前後における関係者のご苦労とその過程についての「なぜ」に対する「答」が語られていました。初めて参加しましたが、奥の深い話で余韻が残りました。
(*し尿研究会会員)

報告・し尿研究会 特別企画

し尿研究会の例会は、通常、平日の夕方から開く「講話とディスカッション」が定番になっていますが、たまには太陽が高い時間に集まり、もう少しアクティブなこともやってみたらという意見があり、特別企画として次の二つの催しを実施しました。なお、時間的な余裕がなく、「ふくりゅう」への予告ができませんでしたことをお断りします。

区立新宿歴史博物館の見学

平成15年8月12日(火)

甲州街道の第一番目の宿場・内藤新宿の町並みを再現した大型の模型を前にして、学芸員の方から説明を受け、質疑応答をしました。街道筋の建物の裏にある外トイレもちゃんと再現されており、その数の多さにはびっく

りしました。馬の背に積まれて運ばれる肥桶も。この外、江戸時代の水道の木管や石管も展示されていました。

江戸東京たてもの園の見学

平成15年10月5日(日)

当園は小金井市の玉川上水の傍に在る、江戸東京の歴史を今に伝える文化的価値の高い建物を移築し、復元・保存し、展示している野外博物館です。農家、商家、住宅などが20数棟ほど。民具、商品の陳列棚、家具なども復元されています。もちろんトイレもです。わが会員の一人は、さっそく実測に余念がありませんでした。この触れることのできる博物館では、その建物が建っていた時代の生活を擬似体験することができます。

江戸東京たてもの園を見学して

小松 美佐子*

そういえばこんな生活があったかもしれません。商家、写真館、銭湯などは、東京の下町で子供時代を過ごした私にとって、懐かしい生活を思い出させます。

江戸東京たてもの園の銭湯「子宝湯」は、宮崎監督の「千と千尋の神隠し」のモデルとなった銭湯であり、有名ですが、私が子供の頃にはこのような銭湯が町にたくさんあって、大人も子供も近所の社交場でありました。ゆっくり大きな浴槽につかったことが思い出されます。

園内の建物から当時の生活様式が想像できますが、今回は、し尿研究会の企画とあって、気になるのはトイレ、そして台所、風呂場などの水場です。

江戸時代にさかのぼりますが、農家の風呂場は床が竹。たらいの湯を体にかけて竹の隙間を湯が通り過ぎて地面に流れていきます。自然換気と排水、なんと効率よくできていることでしょうか。たいていの農家は廊下の突き当たりには便所があり、商家や民家は使用人部屋の隣に便所がありました。

さて、大正、昭和初期は、ちょっとした家庭には使用人がいたのが普通であったといえます。その使用人たちの部屋は、想像以上に狭い処でしたが、仕事場としての台所や食堂は、木製冷蔵庫、外国製オープン、ガス台などがあり、当時の生活が意外にも早くから近代的であったこと

におどろかされました。

園内 27 戸の復元建物の中で、私が一番印象深かったのは常盤台写真場です。現在の板橋区常盤台に昭和 12 年に建てられた写真館で、文化住宅が立ち並ぶ中であって、ひとときモダンなデザインであったといえます。

玄関から内部に入ると玄関ホールの南側には応接室があり、6 帖ほどとさして広くありませんが、木製の床と和風の照明により落ち着きをかもし出しています。食堂と台所の向かい側には老人室が隣接していて、その境には回転式ガラス欄間が設けられています。台所と老人室の両方から食器や台所用品を出し入れできるなど機能的な構造になっています。

上階には写場が高い天井と広々とした空間の中にありました。広い窓から入り込む自然光を利用した特徴的な写場であったといえます。ここで何人もの人々が人生の思い出を映し出したのでしょうか。記念に主人と一枚撮影をしてもらい、昭和初期を体験しました。

今回の企画に参加して、江戸、明治、大正、昭和と一気に時代を駆け抜け、講演会とは異なった楽しい 1 日を過ごしました。企画された幹事さんに感謝します。

(*し尿研究会会員)

シリーズ・博物館めぐり(第4回)

絹の道資料館

東京・八王子市鎌水(やりみず)

稲村光郎(本会運営委員)

JR八王子駅前通りの街路樹は桑である。今や大学の街として知られる八王子であるが、かつては生糸と絹織物で有名であったその証である。その歴史を残す一つの記念として作られたのが本資料館である。本館は正式には博物館ではなく、ハイキングコースである「絹の道」の休憩所という位置づけであり、内容的にも郷土資料館といった趣である。

本館が成功しているとすれば、それは何といてもそのネーミングとストーリー性にある。すなわち、昭和 20 年代に、近代民衆史で知られる色川大吉(東経大)等が、通りかかって「なぜこのようなところに立派な建物があるのだろう」という疑問を抱いたところから、尋ね調べて発掘した物語である。

すなわち当「絹の道」は、幕末から明治の初期 鉄道開設期 にかけて、生糸を横浜へ運ぶルートの一つで、古くから生糸や織物を中心に発達してきた八王子市場の有力な構成員であった鎌水商人の地元を通るものであった。

安政 5 年(1858)の通商条約を契機に開港された横浜では、折からの欧州にお



資料館近くの「絹の道」

けるまゆウィルス病発生により、生糸が花形輸出品となった。1860 年には、鎌水商人が出荷した記録も残っている。そこで当「絹の道」が使用されることになるのだが、それは鎌水から横浜へ 10 里、江戸へは 12 里という三角形の一辺の長さだけが魅力だったのではない。生糸の輸出は、国内需要を無視したものであることから輸出の激増は国内産業や物価に大きな影響を与え、混乱をおそれた幕府は他の四品目とともに江戸の間屋を通すことを命じたのである。江戸の間屋を通せば経費、時間が嵩むことは明白であり、また甲州街道の六つの宿場の口銭も無視できない。かくて抜け道としての不特定多数の「絹の道」が生まれ、宿駅制度を瓦解させ、幕府の「江戸間屋廻し令」を有名無実化させたのである。さらに言えば、江戸から東京への移行時期における打ちこわしなどの社会的混乱や経済危機にもリンクしているし、横浜商人の発展や八王子自体の養蚕農家の没落とも関わっている。その歴史の一コマをしのばせる記念館とも言える。

八王子の養蚕・製糸の歴史は古く、家康の関東支配開始当時の記録が残っている。すなわち天正19年(1591)の検地では、石川村の畑全体の2割近くが桑畑であり、また元禄3年(1690)年の文書では、上栲田村(現東浅川町、初沢町、高尾町、南浅川町)、谷野村、越野村、松木村、大沢村(南大沢)、上柚木村、鎌水村、堀之内村、別所村、下柚木村、大塚村、下長房村(長房町・甘里町)、本八王子村(元八王子町)、上壘分方村、上長房村(裏高尾町・西浅川町)の15か村で養蚕を営んでいたというから、現八王子市街地の大半といってよいであろう。これが明治2年(1869)に神奈川役所に提出された文書では33村、

3800戸でまゆを生産していた。この同じ文書で55名の仲買商人があり、その内24名が本館のある鎌水村に所属していた。鎌水商人といわれるゆえんである。

当館は、都立大学等のある南大沢とは野猿街道を挟んだ反対側に位置し、京王線北野駅からはバス道路を経て、徒歩1時間程度、その内ハイキングコースとしては20分程度の絹の道を下ったところにある。往時の商人屋敷の跡に、その建物を模して建てられた立派な施設である。

URLは以下の通り。

<http://homepage3.nifty.com/hachioji-city-museum/ins/kinumichi.html>

運営委員会・事務局より

本会報と同時に会費未納の会員に督促状をお届けしています。本会の運営は会費収入で行われておりますので、この際是非お納め願います。なお、督促状と行き違いでお納めいただきました会員の皆様には失礼をお詫びいたします。

11月15日に行われた研究発表会については1~4ページで報告しておりますが、開発途上国で衛生にアクセスできない多くの人に少しでも支援できるよう、本会も海外技術協力事業に着手していこうという提案にご理解が得られたと思います。今後、その具体化に向け、助成事業等への申請を含めた作業に取り掛かっています。本会が海外技術協力を様々なかたちで関与していく上で豊富な人材を擁しているということは間違いなくと思います。ひとりでも多くの会員に参加していただきたいと考えています。また、海外技術協力に参加するため、新たに会員になっていただけそうな方がおられましたら、お誘いいただければ幸いです。

下水道博物館情報交流会議が10月30日に名古屋市で開催されました。栗田彰評議員が「下水道博物館を想う」と題し、江戸の下水道専門家として、小平市の「ふれあい下水道館」の展示を手がけられたことなど豊富な経験をもとに講演を行いました。予算削減、展示内容の陳腐化など切実な課題に直面しているだけに活発な議論が展開される一方、懇親会ではフランクに本音で情報交流が行われていたように思います。これからも継続することが確認され、本会としても普段の情報交流の場として、インターネットによるメーリングリストを開設するなど、協力・支援していきたいと思っております。

11月21日シンポジウム「東本願寺と市民がともにできること~いのちと自然のこれから~」が開催され、200名以上が参加しました。午後9時からの懇親会にも70名以上が参加し、宗教法人と環境NGOの協働がスタートしました。詳しくは月刊下水道2月号に掲載される「京都・東本願寺から考える雨と水~市民とともに歩む、いのちと自然~」(酒井彰)をお読みいただきたいと思います。会員の皆様にも今後の活動にぜひ参加していただきたいと思っております。具体的には何をやるかはこれから議論していきます。本会のホームページをご覧になったことがありますか?し尿研究会のような分科会活動のサブページ、イベントの終わってからの対応など、リニューアルを考える時期ではないかと考えています。ご協力いただける会員を募っています。

編集後記 ふくりゅう 34号を発行してから多くの行事が目白押しに行われたように思います。運営委員会で、運営委員がいくつもの役を兼ねた結果、いくつかのミスもあり、やや無理があったのではということが研究発表会の反省としてあがりました。▶本号の内容を見ても会の活動がますます多様化してきています。そこへ海外協力事業ということになれば、専任者を置くか、活動ごとに分科会を設け、それぞれの活動を担当してもらい、運営委員会集中ではなく、活動の多くを分散化していかなくては機能していけないように思います。▶し尿研究会のような成功例もあることから、当面、後者の方向で進めていきたいと思っております。より多くの会員の方々が、この活動だったら主体的に参加したいという活動に、積極的にご協力いただけたらと思っております。▶海外協力事業も独自に活動助成を得ながら、分科会活動として行こうと考えています。(酒井 彰)



←バングラデシュ農村の道、日本の一昔前の農村風景に相通じるところがあるように思われます。(ダッカ近郊にて)

ふくりゅう 通巻35号目次

第7回下水文化研究発表会開催される 研究分科会座長報告 第7回下水文化研究発表会講演集ご購入のお願い	1
優秀論文賞受賞者・海外招聘者からのメッセージ	3
中川神社の社殿(祠)再建される	5
第29回定例研究会報告 報告 し尿研究会特別企画	6
江戸東京たてもの園を見学して博物館めぐり(4) 絹の資料館	7

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>